
日本ソーシャル・イノベーション学会・新企画

「2025 年度フィールド・リサーチ」報告書

2025 年度より年に 1 回程度ソーシャル・イノベーションの現場を訪れての調査研究を行うフィールド・リサーチを進めることとしました。第 1 回フィールド・リサーチは、沖永良部島で実施されました。プログラムの詳細は以下のとおりです。

企画委員会・フィールドリサーチ

担当：新川達郎、服部篤子

=====

1, テーマ 沖永良部島のエコロジカルなライフ&ワークスタイルに学び日韓比較を通じてソーシャル・イノベーションを考える

2, 目的 離島におけるソーシャル・イノベーション事例について、離島ならではの課題にむきあう住民たちの挑戦に焦点をあてフィールドスタディを行う。離島は社会全体の縮図であり現在の社会実験や動向が近未来のデザインを考えるうえで有用であることを前提として、ライフスタイルの変革の可能性やエコロジー&エネルギー政策、SI 人材の育成について考える上で貴重な場である。それらの成果を踏まえて日韓の SI 研究関係者が意見交換を行う。

3, 概要

- ✧ 場所 沖永良部島
- ✧ 日程 2026 年 3 月 4 日（水）～6 日（金）
- ✧ 主催：日本ソーシャル・イノベーション学会
学会研究会「東アジアのソーシャル・イノベーション研究会」
- ✧ 共催：地球村研究室／酔庵塾（すいあんじゅく）、共催：「東アジアのソーシャル・イノベーション研究会」、共催：「日本 SI 学会将来構想研究会」

4, 宿泊場所：知名町。おきのえらぶフローラル、<https://www.floral-hotel.com/>

5, 募集人員 10 名程度（先着順）

出席メンバー

日本語側（五十音順、敬称略）：石田秀輝（沖永良部島）、小林和子、新川達郎、畑中寛、服部篤子、吉川玄徳

韓国側：Suk-Ki Kong, Romee Lee, Joanne E. Cho, Jaewon Jeong

コーディネーター：株式会社 オールディ・ビレッジ（古村英次郎）

6. 現地調査研究活動費

学会の補助および、酔庵塾共催により諸々のご協力をいただいて実施しました。旅費食費、宿泊費は自己負担。（会計報告は以下のとおりです。）

摘要		金額
収入の部		
学会フィールドリサーチ補助費		50,000
東アジア研究会費、将来構想研究会費		80,000
合計		130,000
支出の部		
謝金		
	アトリエカミジョー、西田真弓様	5,000
	要ファーム、要 秀人様	5,000
	小規模多機能自治、スマッピー様	5,000
	クラフトビール工房様	5,000
講演、ビーチクリーン実施謝金	うじじきれい団様	22,000
フィールドワーク車両手配料		55,000
フィールドワークコーディネート・アテンド料金		33,000
		130,000

7, 日本ソーシャル・イノベーション学会「第1回フィールド・リサーチ」スケジュール

◆3月4日(水)

9時開始 日韓ソーシャル・イノベーションワークショップ(日韓双方の研究発表など)

会場: エラブココ-おきのえらぶ島観光協会

石田秀輝先生特別講演「地球1個で暮らすための未来は沖永良部のライフスタイルにある」<https://ameblo.jp/emileishida/>

韓国側報告: 韓国ソウル大学アジアセンター(SNUAC) Suk-ki 先生含む3名
<https://snuac.snu.ac.kr/eng/> 20分程度の報告、10分の討論、3報告

Presentation 1 Rooted Cosmopolitan Citizenship and Local Resilience in East Asia:Focusing on Light Community Strategy,

Suk-Ki Kong, Seoul National University Asia Center

Presentation 2 Dr. Romee Lee,

Presentation 3 Dr. Joanne E. Cho,

Presentation 4 Dr. Jaewon Jeong

Open Discussion by Prof. Atsuko Hattori, Dr.Kazuko Kobayashi,

12 時 00 分 昼食・島のお弁当【会場: エラブココ】

13 時 0 0 分 午後の部開始

日本側報告: 参加者から 20 分程度の報告 10 分の討論。

Presentation 5 Toward Cultivating Social Innovation Designers in Japan, by Prof. Prof. Tatsuhiro NIKAWA, Doshisha Univ.

Presentation 6 Education of Social Innovation Designer in Ryukyu University, by Prof. Hiroshi HATANAKA, Ryukyu Univ.

Presentation 7, Regional Industrial Innovation in the disaster-stricken area: the case study of Kesen-numa of Tohoku Pacific Coast Region, Prof. Gentoku YOSHIKAWA, Tokyo Metropolitan Univ.

Open Discussion by Prof. Atsuko Hattori, Dr.Kazuko Kobayashi,

16 時 30 分 うじじきれい団(家族が起こした地域イノベーション)

<http://ryuzofurukawa.com/spcontents/ujiji/index.html>

https://www.facebook.com/ujjikireidan/?locale=ja_JP

17 時 00 分 ワークショップ終了

18 時 30 分 地元料理

◆3月5日(木)

6時半 うじじきれい団とビーチクリーンへ。

7時半 ホテルに戻り朝食

9時 アトリエカミジョー 西田真弓さん(伝統織物の大島紬の再活性化)

10時半 要ファーム フィールドワーク

<https://note.com/kanamehideto> (要 秀人さん/えらぶ移住牛飼いチャンネル)

12時 昼食 地元料理

13時半 住吉字 小規模多機能自治 プレゼン・フィールドワーク。NPO 法人 SMAPPY
新納 佳恵さん

15時半 沖永良部島のクラフトビール工房フィールドワーク。合同会社 Uitaba 大山茂さん

18時半 島民交流会【会場：島食堂ゆいたば】

◆3月6日(金)

9時 振り返りワークショップ【会場・エラブココ】 12時 昼食 西郷食堂

13時半 和泊町役場訪問、前 登志朗町長

15時半 知名町役場訪問、今井 力夫町長 (沖永良部は2町からなる)

18時半 フェアウエルパーティ【会場：酔庵】

=====

活動概要として、学会NOTEの記事を以下に再掲します。

NOTE <https://note.com/sigakkai/n/n07d9b3a6726f>

2026年3月4日～6日にかけて日本SI学会第1回ソーシャル・イノベーション＜フィールド研究会＞を実施しました。会場の沖永良部島は、主要都市から那覇空港もしくは、鹿児島空港経由でアクセスすることができます。

本研究会の目的は沖永良部島で起きている社会イノベーションの実際を体感すること、この島に生じている変化の要因を明らかにすること、その汎用性を探索すること、そのための意見交換を行うことでした。離島は社会全体の縮図であり現在の社会実験や動向が近未来のデザインを考えるうえで有用であるという仮説のもと、ライフスタイルの変革の可能性、エコロジー&エネルギー政策、SI人材の育成について考える場になることが、沖永良部島をSIフィールドとした理由の1つです。

本研究会には、類似した社会課題を多く抱える日韓のSI研究関係者が集いました。共にフィールド調査を行うことで、多様な視点から意見交換し考察する手法をとりました。

さて、初日は、日韓双方から各自のSI研究発表を行います。沖永良部島では「小さな」島から「地球」規模の課題に取り組む住民の姿が散見されていることについて、その意味を問う先行研究があります。そこでまずは、石田秀輝先生（東北大学名誉教授・酔庵）より、The future in which we can be sustainable to live is shown through the way of Okinoerabu-jima Island's life style.と題した基調講演が行われました。長年にわたる現地での生活と研究成果のエッセンスを聞くことができました。

終日にわたるワークショップでのKey wordsは以下でしょうか。

One planet

Rooted Cosmopolitan citizenship

Care democracy

Local governance

また、SI教育、SIデザイナーについても熱心に話し合いが行われました。

2日目は、フィールド調査です。地域の魅力を学び、大自然を感じる観光を提案しているオールディ・ビレッジの古村英次郎さんのコーディネートと運転で島中を巡りました。車窓からはユリ畑、収穫最盛期を迎えているじゃがいも畑、パパイヤや島のオレンジの果樹が目にとまります。一部のお墓のカタチからは、琉球の文化が見て取れます。現地の説明によると鹿児島県ですが文化圏は沖縄のようです。

今回のフィールド調査では多様なアクターに会うことができました。

ユニークなライフスタイルとワークスタイルをもっている人々であり、そのモチベーションや手法に特徴をみることができました。さらに、アクターたちの活動を支える環境としてのコミュニティのあり方にも着目しました。

I ターンの移住者も増えているそうですが、何よりも U ターン、そして生まれ育ってはいないが親族が島と縁がある R ターンの活動に議論が集中しました。なぜ、このつながりの強い島に創造性の高い人々がやってくるのでしょうか？閉鎖性と開放性のバランスが良さそうです。なぜでしょうか？

リターンの動機は？

子どもの頃から感じていた地域の宝をいつか生かしたかった

戻ってきて地域の宝に改めて気付いた、

大震災を経て農業に関わりたかった

変化の手法は、

国内外での経験や構築してきたキャリアを生かす

地域で学び、信頼を得た

どうも共通点に、

自己の利益だけではなく、他者を想う気持ちがありました。他者とは人だけではありません。

これらの活動を推進する人々は、多様な活動の中でも酔庵塾の活動に少なからず影響を受けています。

学び・ナレッジを豊かにするハブになっていると感じられました。

ブログから少し引用します。

「塾があったから島に U ターンして仕事が続けられた」「毎回塾で学んだことの 3 割くらいしか理解できないが、そのうちの 2 割を人に伝えて、それを繰り返しているうちに随分物知りになってしまった」「塾で学んだことを子どもたちに伝え続けていると、作文で大きな賞を取ったり、国際会議に呼んでいただいたり、子どもたちも含めてとても豊かになった」「塾に来ると希望が湧く」・・・ 100 回目に伺った塾生たちの意見の一部だそうです。「塾が宗教集団だと思われていて、入信したのかと怪訝な顔をされた」というのが、島での当初の反応だったようですが、

最終日酔庵での集まりにお招きいただくと、地域で活動している人々、役場の人々、近所の人々などが混じりあっていました。最後は皆が輪になって地域の音楽に合わせて踊ります。島の知とナレッジのハブは、豊かな「食」に囲まれた「楽しい」「学び合い」の場でした。

ここでは、一部を紹介するにとどめたいと思います。長文になってしまいそうです。それ以上に、実際に五感で体感することが最も重要ではないかと思います。研究会の振り返りの席の最後にこの一言がありました。ソウル大学から参加された先生は、創造的な人々を受け入れているのは、この地の自然ではないか、持続可能な自然を残してきた島の人々に持続可能性のヒントがある、という発言ができました。

そうでした。酔庵の石田先生の書籍にそう書かれています。我々は体感して気づきました。

これからも学会ではフィールド研究会を実施できればと思います。日本各地にソーシャル・イノベーションの担い手や変化の芽を育てている人々がいることは間違いありません。学び合う機会、SIのトリガーとなるフィールド研究会を実施していきたいと思います。

前泊、後泊をあわせて5日間ご一緒した皆さま、ありがとうございました。